令和5年9月19日

課題解決型実践事業
「身体表現的手法を用いた友達作りワークショップ（栗熊小学校）」
業務委託

報告書

友達作りワークショップ

実施日：　令和5年9月5日（火）

講師　　：　yummydance（ヤミーダンス）のメンバー４名

場所　　：　丸亀市立栗熊小学校　体育館

対象　　：　丸亀市立栗熊小学校

１年生、２年生、３年生の児童57名

実施日	スケジュール	学年
9月5日（火）	2時間目　9：30～10：15	3年
	3時間目 10：35～11：20	2年
	4時間目 11：30～12：15	1年

アンケート結果

回答者　：　丸亀市立栗熊小学校教員　8名

管理職2名
学級担任3名
特別支援教育支援員1名
養護教員１名
専科教員１名

ワークショップの感想を５段階で評価

全くそう思わない		どちらでもない		とてもそう思う
1	2	3	4	5

		４か５で評価した割合	7名の平均点
1	普段より積極的に参加していた児童が多かった	100%	4.75
2	新しい一面がうかがえた児童がいた	100%	4.75
3	普段より自己表現していた児童がいた	100%	4.75
4	普段は消極的な児童が楽しそうにしていた	100%	4.63
5	普段は一緒にいない児童同士の交流が見られた	100%	4.5
6	自分自身にも新しい気付きがあった	100%	4.88
7	授業に取り入れられそうな要素があった	100%	4.75
8	ワークショップ後、児童の様子に変化があった	87.5%	4.38
9	今後も舞台芸術のプロによるワークショップを取り入れたい	100%	4.88

アンケートの自由記述欄の回答

普段は型にはまった授業が多い中、今回のようなワークショップでは自由な発想で「どれも正解！」と思える活動ができ、とてもよかった。
表現をした後にみんなからもらえる称賛の言葉や、たくさんの拍手により、自己肯定感がとても高まったのではないかと思う。
様々な人数での活動により、関わりの少ない児童同士も仲良くできることが良いと感じた。
呼ばれたい名前を名札にして呼んでもらうことが、親近感がわいて良い。
ワークショップ終了後の休み時間は、子ども達がすぐ「ねんどマン」をやっていた。

アンケートの自由記述欄の回答

児童の内面を引き出す手法は、流石プロだと思った。 私たち教員も身につけなければならない技術だと思う。
子どもたちが本当に楽しそうにしていて、今回（ワークショップを）お願いして良かった。
子どもたちが、その場で即興的に創作していく過程がすばらしく、とても感動した。
４名のプロの方に導かれ、自分の思いを表現することが苦手な子どもたちも、友だちと心の内を表出することができたと思う。
今日をきっかけに、子ども同士の様子に今後どのような変化が見られるか楽しみ。
「また来年も来てくれるかな」など、また来ていただけることを望んでいる児童も多いため、 ぜひ来年度もよろしくお願いします。

ワークショップ写真

自由なポーズをつなげて橋をつくる「人間ブリッジ」

自分では動かない「ねんどマン」の体を、自由に変えて
面白いポーズをつくる

所感

【1年生】

　1年生ながら、理解力や対応力といった能力が高いように感じた。言葉の説明はほぼ不要で、アーティストが見本の動作を見せただけで、プログラムのシステムを理解し、楽しんで取り組めていた。

例えば、2人組になって自由なポーズを順番につなげていく動きでは、一人がポーズを決めると、ぴたっと止まり、次の子がつながってくれるまで、じっと待つことができる。また、見ている人に向けてポーズをしっかりと見せてくれ、自分たちの表現を他者に伝える意識があると感じた。

【2年生】

　体の一部に触れながら、自由なポーズで次々とつながっていく「人間ブリッジ（橋）」では、前の児童が足を上げたまま止まっているのをみると、楽な姿勢になるように、次の児童は自然に手を添え支えるポーズをとる様子が見られ、相手を思いやる気持ちが含まれた表現が何度もあった。

「ユーチューバーやったら絶対バズると思う。」「（1・2年生は秋の遠足で瀬戸大橋記念公園へ行くため）本物の橋の前で人間ブリッジやりたい。」といった子どもらしい感想を聞くことができた。

【3年生】

代表者一人が、自分では動けない粘土役になり、その他の児童が一人ずつ順番に、人間粘土役の体の一部を自由に動かすことで、面白いポーズをつくる「ねんどマン」では、座っている粘土役を立たせることに挑戦しているグループがあった。背中から抱えて持ち上げても、足を動かしていないので、ねんどマンは立つことができない。どのような段階を踏めば人の体は立つことができるのか、グループで意見を出しながら協力して取り組むことができた。

子ども達からは「人の体で色々な形ができてびっくりした。」「体ってぐにょぐにょしていると思った。」「みんなで合体できたのが楽しかった。」といった感想を聞くことができ、自由な表現を楽しめていること、体の仕組みや他者に触れることでの気づきがあったこと、協力することでの達成感があったことがわかった。

【プログラムを通じて】

普段から学年を越えた交流が盛んな学校で、高学年の様子を低学年はいつも見ているそうで、今回ワークショップに参加してくれた低学年の児童は、年齢の割に、話をしっかりと聞くことができ、乱暴な動作もなく、他者に対するやさしさがすでに身についていると感じた。

他校では、ワークショップが始まったばかりの時間に、子どもたちが興奮して走り回るクラスもあったが、栗熊小学校ではどの学年も、ウォーミングアップの時間から集中してワークに取り組めており、「やりたい！」「楽しそう！」といった声が児童からすぐにあがるという参加意欲が高かった一方で、楽しみな気持ちを上手くコントロールすることもできていた。

各学年１クラスずつの小規模な学校ということもあり、男女の区別なく、どの子とも自由にグループを作って取り組めるし、体が触れ合った遊びも慣れている様子であった。そのため、本ワークショップの目的のひとつである「友だちづくり」はすでにクリアしており、自分や他者の体について理解を深めること、自由な表現を楽しむこと、周りをよく観察し、他者の表現を受け入れることといった、次のステップをより体感してもらうことができた。また、先生方のアンケートからもこうした成果を感じていただけていることが見て取れる。